

コース	A コース
プログラム	ビクトリア大学 ISIBM
渡航国	カナダ
渡航期間	3 週間
所属学部	国際商学部

私はこの夏約一か月間カナダに滞在し、ビクトリア大学 ISIBM プログラムに参加しました。この一か月は私にとって、二年間の大学生活の中で最も濃い時間でした。感じたこと、学んだことがたくさんあるので以下にまとめていきたいと思います。

初めに、大学の講義形式がとても自由だと感じました。ISIBM プログラムでは6人の教授の講義を受けました。その6人の教授全員が授業時間へのこだわりはありませんでした。学生の要望に合わせた休憩時間を組んだり、その後の予定に合わせて柔軟に授業時間を変更したりしている姿勢が印象的でした。

講義の内容は、business communication、entrepreneurship、service management の大きく三つに分かれていました。Business communication の講義では、コマーシャルの効果を上げるコツを実際の企業 CM を分析しながら学んだり、ゲームなどを通して、印象的なプレゼンテーションを行うために必要な技術を学んだりしました。この講義の最終的な課題は、グループに分かれて起業案を考案し、25分間のプレゼンテーションを行うことでした。私のグループは、イギリス人、台湾人、シンガポール人と日本人の四人のメンバーでした。起業案は、「Food For All」という名で、シンガポールの貧しい子供たちにフードロスになる食材を分け与えるというものでした。

プレゼンテーションを成功させるため、授業終わりにみんなで寮に集合し11時過ぎまで案を練ったり、朝から教室でプレゼンの練習を繰り返したりしました。この Food For All の案が完成するまで、各国で問題になっていることを話し合った時間がありました。この話し合いで、その国ならではの社会問題を知ることができたり、同じような問題に対して対処できている国と対処できていない国の違いを知ることができたりしてとても勉強になりました。この時代ならではのコロナに対する考え方やワクチン事情などを話せたことも楽しかったです。

このような話し合いを繰り返しながら何度も練習したおかげで、私たちのグループは Best Overall Presentation として表彰していただくことができました。原稿を暗記したう

際交流の楽しさなど本当に多くのことを学ぶことができました。しかし、一番の収穫は、英語力向上へのモチベーションを得られたことだと感じています。もっと英語を上達させて、様々な国に行ってみたい、交流したいと思うようになりました。そのため、帰国してからも、プログラムでできたお友達と SNS を通じてこまめに連絡を取っています。これからも、この一か月で得られた学びと、英語へのモチベーションを忘れずに大学での勉強に励んでいきます。

貴重な経験を与えてくれた両親や大学、ビクトリア大学の先生方、同じプログラムに参加していたメンバーすべてに感謝しています。ありがとうございました。

コース	A コース
プログラム	ビクトリア大学 ISIBM
渡航国	カナダ
渡航期間	3 週間
所属学部	国際商学部

1. 講義内容

ISIBM プログラムは「ビジネスコミュニケーション」、「アントレプレナーシップ」、「サービスマネジメント」、「インターナショナルビジネス」の4つの講義から構成されている。すべての講義で意見、感想、質問等学生の主体的な発言が求められ、あらかじめ設定されたグループでの議論やプレゼンテーションも行われる。特にこのプログラムの核である「ビジネスコミュニケーション」の最終課題は、グループで新しいビジネスを発案しプレゼンすることであり、より具体的で明確な案が求められた。また、「サービスマネジメント」の講義では、ISIBM プログラム内のイベントであるシドニーナイトマーケットでのショッピングの機会を利用し、マーケットでどのようにパラダイムシフトを起こすかという課題が出される等、講義外のイベントと結びつけた学習もあった。

特に印象に残っているものは「アントレプレナーシップ」の課題として行われた「クリップチャレンジ」である。「クリップチャレンジ」とは、ペーパークリップをそれと同等またはそれ以上の価値があるものと交換し、さらに交換を繰り返すことでどれだけ価値の高いものを獲得できるかというチャレンジである。大学のキャンパス内で出会った人々に交換を持ちかけ、6回目の交換で終了するというルールのもと行われた。声をかけた人の中にはこの活動を経験したことがあるという人も少なくなく、人との出会いを楽しみながらモノの価値について考えることができたという点で印象に残っている。

2. 語学学習への気持ちの変化

今回のプログラムの参加が初めての海外渡航であり、3週間以上という期間英語に囲まれたことも初めての経験となった。渡航前は自身の英語力への不安ばかりだったが、実際にプログラムに参加している学生と英語でコミュニケーションがとれたことで、普段の英語学習の自信があがり、モチベーションの向上に繋がった。また、自身の英語能力が足りずに言いたいことが上手く伝わらない、なまりのある英語が聞き取れないという場面が多くあったことから、この悔しい経験をバネに語学力の向上を目指したい。

3. 学業への向き合い方

「1. 講義内容」で述べたように、普段横浜市立大学で受講しているほとんどの講義とは形式が異なり、ビクトリア大学での講義は生徒の発言の機会が多くあった。発言するということは講義内容の理解を深めることに大きく役立つことから、今後講義を受講する際は、機会が与えられればいつでも発言できるような姿勢で臨みたい。

また、参加している学生の専門分野が、看護学や栄養学などばらばらであり、それぞれの強みは何かということを考える機会も多くあった。このことが、自身の専門分野について理解をもっと深めたいと思ったり、自分が学びたいことを改めて考えたりするきっかけとなった。

後期からは本格的にゼミ活動が始まるため、これらの気付きやこのプログラムで学んだことを活かす機会も多く見つけることができると考えられる。これまで以上に積極的に学業に取り組みたい。

コース	A コース
プログラム	ビクトリア大学 ISIBM
渡航国	カナダ
渡航期間	3 週間
所属学部	国際商学部

1. 授業内容

授業は主に 4 つの領域に分かれて展開された。Business Communication で得た知識をもとにし、Entrepreneurship, Service Management, International Business と領域が広がり、知識を深めていった。

Business Communication では、日本やカナダ、イギリスなど、様々な国の持つ価値観や国民性の違いについて理解したうえで、それぞれの国における広告やビジネスアイデアについて知り、その比較を行った。また、プレゼンテーションにおける工夫についても学んだ。Business Communication はプログラム全体の基礎となるような内容であった。レポート課題として、広告を 1 つ取り上げ、当該広告の持つメッセージやターゲット、広告に反映されている国民性を分析した。私のグループでは資生堂を取りあげ、長い歴史のアピール等から顧客の信頼を獲得する狙いがあると分析した。

Entrepreneurship では、新たなビジネスアイデアを生み出す方法や、ブルーオーシャン戦略、パラダイムシフト等の市場分析の手法を学んだ。実践課題として、ペーパークリップを大学内や街中で出会った人に交換してもらい、より価値のある物を手に入れるというアクティビティを行った。ペーパークリップの価値を相手に伝えたり、需要のある場所を訪れたりするなどの工夫が必要だ。私のグループでは、ペーパークリップの需要がある場所として初めに事務室を訪れ、最終的にサングラスを手に入れることができた。

Service Management では、ケーススタディを用いて、顧客の信頼を獲得しリピーターを増やすための工夫を学んだ。また、従業員を大切にすることが顧客ロイヤリティを獲得するサービスに繋がることも分かった。

International Business では、企業のグローバル戦略について学習した。他国に進出する際に、自国と進出国の違いを理解するために CAGE フレームワークが活用できる。言語や宗教など Cultural Distance(文化の距離)、法律や社会制度などの Administrative Distance(政治の距離)、2 国間の距離や国土面積などの Geographic Distance(地理的な距離)、GDP や賃金などの Economic Distance (経済的な距離) の 4 つの観点から分析する

ことで、海外進出の成功に近づく。実際に、カナダにあるマクドナルドを訪れ、日本の店舗との違いを分析しプレゼンテーションを行った。カナダのマクドナルドにはサラダがなく、ポテトやナゲットなどの他のサイドメニューの方が需要は大きいことが推測できた。一方で、肉の入っていないビッグマックが提供されており、ヴィーガンでも楽しめるメニュー展開になっていることも日本との違いである。

上記の知識を踏まえ、グループごとにベンチャービジネスアイデアを検討し、プレゼンテーションを行った。私のグループでは、留学生や観光客向けに、他国で公共交通機関や通貨を使う際のサポートをするアプリを考案し、ベストアイデア賞を受賞することができた。

2. 修得した知識

まず、より実践的なビジネスの知識を養えた。前述の通り、このプログラムでは授業内で得た知識を活用し、実際にグループでビジネスアイデアについてプレゼンテーションを行うという構成となっていた。様々なフレームワークを活用し、授業内で取り扱ったケースを参考にすることで、実現しうるビジネスアイデアを考案することができた。プログラム内だけでなく、横浜市立大学で養った知識も活用でき、その重要性を実感することができた。

また、プログラムではグループワークが多く時間を占めており、日本人以外の学生とも共同作業や話し合いをする時間があった。言語はもちろん、文化や価値観の違いがあり困難に感じることもあった。しかし反対に、異なる価値観や文化を取り入れることで、より革新的なアイデアを得る場面に何度も遭遇した。この経験から、多様性を尊重することの重要性や、異なるルーツを持っていても協力し合えることを学んだ。

3. プログラム参加後の変化

プログラム参加前と比べ、ビジネスに関する知識や英語力を養えたことはもちろんだが、生活力や危機管理能力が身についた。プログラム期間中は、海外で生活する上での注意点を忘れず、持ち物の管理等を徹底した。また、食生活や出費の管理などからも、1人で暮らすことの大変さを学んだ。感染対策に万全を期していたものの、帰国前のPCR検査で新型コロナウイルス陽性と診断されてしまった。カナダ滞在期間が延び、ホテルの予約や移動手段の手配、帰国日等の新型コロナウイルスに関する情報収集、支払いや保険に関する情報収集等を自ら行わなければならない状況であった。これらの経験から、問題に適切に素早く対処する能力が身についた。

また、日本とは異なる価値観や生活様式に触れ、将来の海外移住という選択肢が生まれた。カナダで1か月間生活し、政治や文化、価値観を非常に魅力的に感じた。カナダ以外にも、様々な国を訪れ、それぞれの国の良さを吸収したい。

4. 今後の展望

まず、更に深いコミュニケーションを多くの人ととれるようになるため、英語力を向上させたい。今回のプログラムを通し、高校時代の留学よりも英語でのコミュニケーション能力が向上したように感じた。しかし同時に、授業内のディスカッション等でより深い議論を行いたいと感じた。単語や文法の勉強をするとともに、英語話者との会話の機会を積極的に作っていききたい。

また、プログラム内で学んだことを大学の授業や就職活動など、日本での生活においても積極的に活かしたい。